

《書 評》

*Maria Kantiréa, Les dieux et les dieux augustes: le culte
impérial en Grèce sous les Julio-claudiens et les Flaviens:
études épigraphiques et archéologiques*

Paris: Diffusion de Boccard, 2007, pp. 285.

藤 井 崇

1980年代に Price (S. R. F. Price, *Rituals and Power: The Roman Imperial Cult in Asia Minor*, Cambridge, 1984) と Fishwick (D. Fishwick, *The Imperial Cult in the Latin West: Studies in the Ruler Cult of the Western Provinces of the Roman Empire*, 3 vols. 8 parts, Leiden, 1987-2005) によって新たな活力を与えられたローマ皇帝崇拜研究は、2000年代に入っても、依然としてその力を失っていないようにみえる。近年に出版された重要な研究としては、例えば I. Gradel, *Emperor Worship and Roman Religion*, Oxford, 2002 や H. Cancik and K. Hitzel (eds.), *Die Praxis der Herrscherverehrung in Rom und seinen Provinzen*, Tübingen, 2003 があげられるだろう。これらの研究にみられる重要なモチーフのひとつに、ローマ帝国内の地域ごとの社会構造や宗教体系と皇帝崇拜との関係がある。つまり、近年の研究の多くは、各地域の属州民がおこなった皇帝崇拜という儀礼行為を、その地域の社会的・宗教的コンテクストに位置づけながら、ローマ帝国における皇帝崇拜の多様性を主張しているのである（例えば M. Beard, J. North and S. Price, *Religions of Rome*, vol. 1, *A History*, Cambridge, 1998, p. 348）。もちろん各地域の皇帝崇拜の独自性を指摘するだけでは非建設的であるので、多くの場合、他地域との比較を視野に入れながら研究がおこなわれている。

本書の目的は、属州アカイア（大体ペロポネソス半島とギリシア中央部に相当）における皇帝崇拜、特に初代皇帝アウグストゥスからフラウィウス朝最後の皇帝ドミティアヌスまでの皇帝崇拜をとりあげ、皇帝崇拜が当地の宗教的コンテクストなかに組み込まれ発展していく過程を明らかにすることである。属州アカイアの地域的文脈を重視する点で、本書も上記の研究史の延長線上に位置づけられる。本書の出版は、著者の Kantiréa がパリ第一大学に提出した博士論文がもとになっている。論文の受理は2003年とのことで、論文の指導者および審査官として、M. Christol, J.-M. David, J.-L. Ferrary, J. Scheid, K. Buraselis といった名前があげられている。著者の Kantiréa は、現在、講師としてキプロス大学の歴史考古学部に在籍し、ローマ時代のギリシア語圏の研究を継続している。本書評の手順であるが、まず本書の内容を章別に要約した後、次に評者が疑問に思った点および議論を深めたい点を2

つ取り上げ、本書にたいし独自の分析をくわえたいと思う。なお、*REG* 誌上にてすでに F. Lefèvre と S. Follet が本書の紹介をしているが(*Revue des études grecques* 121, 2008, p. 402-403 and 607-608), 特に後者は Kantiréa が用いたギリシア語銘文史料について批判的検討を加えているので、ギリシア語銘文に特に関心のある読者はそちらもあわせて参照されたい。

では、まず本書の構成を確認しておこう。

Introduction / Chapitre I: La tradition hellénistique et républicaine de l'évergésie / Chapitre II: De l'évergésie à la divinisation: l'intégration du prince et de la *Domus Augusta* dans le système honorifique et le panthéon des cités grecques / Chapitre III: La topographie du culte impérial: l'intégration des dieux augustes dans l'espace civique et sacré grec / Chapitre IV: Les dieux augustes et leurs adorateurs: le rôle des élites locales dans la création et le développement du culte impérial/ Conclusion / Appendices / Bibliographie / Indices / Table des matières / Tableaux / Stemmata / Planches

Introduction (p. 11-19) では、研究の目的(上述)が設定されると同時に、本書の結論を先取りするような重要な論点が見出されている。まず、ギリシアにおいて、ローマ皇帝と彼にたいする崇拝は、すでにヘレニズム時代から支配者崇拝を発達させていた小アジアとは異なり、基本的に共同体にたいする物理的・経済的な恩恵施与とその恩恵にたいする名誉付与を軸とするエヴェルジェティズムの枠組みのなかで捉えられていたこと。次にこれと関連して、ギリシア人の間では、政治的な意味での名誉(評者が端的にまとめるならば「世俗的」名誉)と宗教的な意味での名誉(すなわち「崇拝」)が厳密には区別されておらず、ローマ皇帝崇拝を研究する際にも、現代的な意味での宗教色・儀礼色の濃い *culte* だけでなく、政治的なものを含めた幅広い名誉を視野に入れなければならないこと。以上の2点をまとめると、Kantiréa は、エヴェルジェティズムの枠内で皇帝に与えられた多様な名誉の総体を、属州アカイアにおける皇帝崇拝の本質と考えているということになるだろう。さらに Introduction では、本書で使用される広範囲の史料群(銘文史料を中心に、文献史料、貨幣史料、考古学史料を含む)の概観もおこなわれている。

続く Chapitre I (p. 21-39) では、ヘレニズム時代初期から紀元前1世紀までを対象として、ヘレニズム王、ローマの将軍や公職者ならびにローマ人全体(または女神ローマ)にたいする名誉=崇拝の事例が分析されている。紀元前2世紀以降、共和政ローマの拡大にともないギリシアにおけるローマの影響力が顕著になるが、その過程で、ギリシアの各共同体はローマの将軍や公職者を「善行者」や「解放者」とみなして名誉=崇拝を与えたり、ローマ人全体や女神ローマを称える儀礼、祝祭を執り行ったりした。これは、スラ、ポンペイウス、カエサル、アントニウスといったローマ史を彩る大將軍も例外ではなく、彼らも当然ながら多くの名誉=崇拝を享受し、テセウスやディオニュソスといったギリシアの英雄・神格と同一

視された。こうすることでギリシア都市は、新しい支配者に恭順の意を示しつつ、みずからの政治・宗教システムのなかに彼らを取り込み、新しい帝国のなかでのアイデンティティを確立しようとしたのである。このようなギリシア都市とローマ権力の関係をローマの政治文化に基づいて表現するならば、ローマの有力政治家とギリシア都市とが保護・被保護の関係で結びつくパロトン＝クリエンテラ関係となるが、Kantiréaはこの両者の関係を、あくまでギリシアの伝統的なエヴェルジェティズムの枠組みで捉えようとしている。

Chapitre II (p. 41-87) は、アウグストゥスからドミティアヌスにいたるローマ皇帝と皇帝家のメンバーにたいする名誉＝崇拜を、年代順に豊富な事例を挙げながら解説する。基本的な分析の枠組みは先に述べたエヴェルジェティズムだが、Kantiréaは帝政初期のアカイアにおける皇帝崇拜の顕著な特徴として、以下の二つの要素を強調する。第一に皇帝および帝国政府の「イデオロギー」の影響。Kantiréaが言及する「イデオロギー」は多様な内容を指し示しておりその明確な意味を特定するのは困難だが、具体的には、ユピテル、アポロン、マルス、ウェヌスなど皇帝や帝国政府が推進した神格とそれにまつわる神話や、帝国中央部の政治動向（特に後継者問題）とそれに応じたプロパガンダを意味している。Kantiréaは、この帝国の「イデオロギー」が、ギリシアのエヴェルジェティズムに基づいたアカイアにおける皇帝の名誉＝崇拜にローマ的要素を加味したと考えている。第二の点は、アウグストゥスからティベリウスへ皇位が継承されるに伴い、初代皇帝に与えられた名誉＝崇拜もティベリウスに相続され、さらには王朝全体にたいする名誉＝崇拜に発展していったことである。この点で興味深いのが、クラウディウス帝以降、現世皇帝以前の皇帝および皇帝家のメンバー全体にたいして用いられた *Theoi Sebastoi*（「皇帝神」の複数形）という呼称である。つまり、王朝にたいする名誉＝崇拜が進むことで、個々の皇帝にたいする個別の名誉＝崇拜は後退し、複数の皇帝が「皇帝神」の概念に集約されていくことになったのである。

次の Chapitre III (p. 89-158) は、皇帝にたいする名誉＝崇拜に関するモニュメント（像、神殿、祭壇など）やそこで催された儀礼や祝祭が、アカイアの都市空間のなかにどのように位置づけられていたかを検討する。ここで扱われる個々の事例の多くはすでに Chapitre II で言及されており重複が目立つが、同じ事例をギリシア都市のトポグラフィーの観点から見直すことで、本章はアカイアという地域的コンテキストにより密着した構成になっている。それにともなって、本章では多くの考古学史料が利用される。地域的コンテキストという視点では、各共同体の伝統的な神格を祀る神域に皇帝にたいする名誉＝崇拜が組み込まれていく過程が興味深い。なかでも特に注目し値するのが、ヘレニズムおよびローマ共和政期に放棄されていた伝統神の崇拜が、ローマ時代に皇帝への名誉＝崇拜を取り込むことで再興されたとする指摘である。例としては、コリントスのアポロン崇拜、アクロコリントスのアフロディテ崇拜、イストモスのポセイドン崇拜などが分析されている。

最後の Chapitre IV (p. 159-93) では、モニュメントから視点を移し、皇帝への名誉＝崇拜を神官やモニュメントの寄進者として支えたエリート層のギリシア人に注目する。供儀儀

礼や祝祭の実行、皇帝像や神殿の建立には当然ながら多額の費用がかかったが、都市上層市民はこの費用を負担し、共同体の尊敬を集めた（これもエヴェルジェティズムの一環である）。これら都市上層市民は、皇帝への名誉＝崇拝を担当する役職をみずからの家系のなかで相続し、有力家系の間で婚姻関係が結ばれることもあった。また、帝国政府との直接のつながりや皇帝への名誉＝崇拝の活動を通じて、帝国レベルの貴族層に到達する有力市民も存在した。つまり、皇帝への名誉＝崇拝は、それに関わる有力者の社会的地位を強化したのである。アカイアでは、皇帝への名誉＝崇拝は、これら有力市民を通じて、基本的に都市のレベルでおこなわれ、都市の上部組織であるコイノン（都市連合）による活動は低調だった。この点は、小アジアの諸属州と対照的である。

Conclusion (p. 195-99) では、エヴェルジェティズムを土台としながらもローマの「イデオロギー」が影響をあたえたとする、アカイアでの皇帝への名誉＝崇拝の基本的枠組みが確認される。アカイアの宗教的コンテクストに関していえば、帝国政府の「イデオロギー」に関係する神格と地域ごとの伝統的な神格とが、ともに皇帝への名誉＝崇拝と関連付けられた。このような皇帝への名誉＝崇拝は、アカイアにおいて、皇帝の支配の正当性が拠って立つ *idées*（「イデオロギー」と読み替えてよいだろう）を流布させる役割を持っていた。一方で都市上層市民は、皇帝への名誉＝崇拝をおこなうことで、皇帝制度への忠誠を示し、政治的服従の姿勢を明らかにすることができたのである。続く Appendices (p. 201-47) には、本書に關係する重要なギリシア語銘文、皇帝への名誉＝崇拝に関与した人物の一覧、さらに皇帝家の人々の彫像の一覧があり、きわめて有用である。文献表、索引、目次の後ろには、Tableaux がおかれ、皇帝への名誉＝崇拝に関するモニュメント、祝祭などが表にされており、これもまた非常に役立つものである。

以上が本書の内容である。次に、以下の2点に焦点を絞って論評をくわえたい。

第一点は、名誉と崇拝の関係である。先に述べたように、Kantiréa は、現代人とは異なりギリシア人は政治的な名誉付与と宗教的な崇拝を区別しなかったとして、属州民の皇帝にたいする行為に関しても、名誉と崇拝を取り合わせて幅広い分析をおこなっている。内的・精神的な「信仰」ではなく、政治的・社会的な意味合いをあわせ持つ儀礼行為に注目して皇帝崇拝を読み解く手法は、冒頭の Price 以来の学界の主流といってよいだろう。ここでは、属州民が皇帝を神として「信じていた」かどうかは問題とはならないのである。ただ注意しなければならないのは、いかに名誉と崇拝が連続的であり、いかに皇帝の表象が神と人との間を揺れ動いていたとしても、属州民は皇帝の神性をその場その場で量的に表現するさまざまな方法を持っていたことである。例えば、皇帝の彫像では、土台の銘文の構造、像の素材・形式、像の設置場所などのさまざまな要素によって、設置者がそれを皇帝の神像として意図していたのか、それとも名誉像や他の神格への奉献物として設置していたのかを読み取ることが可能である。皇帝が神と人の両方の性格を持っていたとしても、個々の場合において、皇帝が神から人へといたるスペクトルのどこに位置していたかをより丁寧に分析する必要

があるだろう。

第二点は、帝国政府の「イデオロギー」とその拡散についてである。Kantiréa の描く構図では、アカイアにおける皇帝への名誉＝崇拜は、一方でエヴェルジェティズムに、他方で帝国政府の「イデオロギー」に影響を受けていたことになる。Kantiréa のいう「イデオロギー」は、皇帝が帝国中央部で推進した神格や中央の政治動向に基づくプロパガンダだが、ではこの「イデオロギー」は誰がアカイアに伝え、属州民にはどのように受けとめられたのだろうか。無論、Kantiréa もこの点をまったく無視しているわけではなく、帝国政府の「イデオロギー」の拡散装置として例えば貨幣に刻まれた図像を強調しているが、全体としては分析が不十分だったように思う。貨幣以外では、皇帝への使節派遣やアカイアにおけるローマ当局者（総督など）との接触、さらには皇帝が皇帝への名誉＝崇拜の儀礼内容に直接関与した事例などが分析対象になるだろう。さらにいえば、帝国中央部での宗教政策や後継者問題が、どれほど素早くどれほど正確にアカイアに伝えられていたか、この点にも一定の留保が必要だろう。属州アカイアの地域的文脈を重視するのが目的ならば、中央の動向に一致した側面のみならず、そこから逸脱した要素をもっと強調してもよかったのではないだろうか。

以上2点、評者が疑問に思った点を述べたが、本書が有益な書物であることに変わりはない。皇帝崇拜をギリシアのエヴェルジェティズムに克明に位置づける筆者の意図はおおむね成功しているといえるし、ギリシア語銘文のみならず、貨幣史料、考古学史料を存分に活用した手法は、ローマ属州史研究の一つの模範といえるだろう。また本書に詰め込まれた豊富な情報は、皇帝崇拜研究者のみならず、ローマ時代のギリシア世界を研究する者にとってもきわめて有用である。